

第8回高知大学看護学会 特別講演

その人らしさを支える

-いのちと向き合って-

内田 望

梶原町立国保梶原病院 院長

医者になって3年目、県内の山間部の病院に勤務していたとき、末期癌の患者さんの担当となった。3年目の医者は何ができるわけでもない。当然、何もできなかった。ご本人やご家族にどう話しかけていいかわからなかった。医者になって8年目に勉強ができる1年が与えられた。癌末期の方に限らず、旅立っていく人とその家族にどう接すればいいかずっと悩んでいたのも、迷わずホスピスで1年間研修させていただいた。

ホスピスでの学びを一言で言うのは難しい。が、あえて言うとしたら、「あなたの人生、それでよかったんですよ」という思いでケアすることである。そして、いずれ自分も逆の立場になること、いつか自分もケアされて旅立つ存在となることを自分自身に言い聞かせながらケアすることである。

人間にとって必ずや一度訪れる「死」から目を背けないこと、そして自然なこととして受けとめること。そのことによって今をどう生きるのかと考えるきっかけとなり、命の大切さを認識しなおす機会になると信じ、講演のたびに受講者に問いかけてきた。死を考えて生きることは最期までよりよく生きることにつながるのだという Death Education の展開である。

看護師は、あらゆる職種の中で最もいのちに寄り添っていける職業だと思う。今学会のテーマである、その人らしさを支える看護。「死」をタブー視せず、「命」をしっかりと見つめることが、病・障がいとともに生きる人によりそうケアにつながるのではないだろうか。皆様と共に考えていきたい。